

実 習 報 告 書

【実習生】中武 美香

【実習期間】：令和7年11月17日（月）～令和7年12月17日（水）

【実習先病院名・指導医名】：

①長崎宝在宅医療クリニック 松尾誠司先生 ②奥平外科医院 奥平定之先生 ③たくま医院 詫摩和彦先生
④阿保外科医院 阿保貴章先生 ⑤谷川放射線科胃腸科医院 谷川健先生 ⑥安中外科・脳神経外科医院 安中
正和先生 ⑦ちひろ内科クリニック 土屋知洋先生

【実習内容の概要】：

今回の実習では、7つの医療機関で訪問診療に同行し、在宅医療の現場を見学しました。これまで病院での勤務経験のみで在宅医療に触れる機会がなかったため、在宅医療の現状を学び、今後の臨床に役立てることを目的として実習に臨みました。実習を通して、患者さんの生活に寄り添った医療の大切さを学びました。

① 長崎宝在宅医療クリニック（11月17日、12月8日）

在宅医療に特化したクリニックで、医師4名体制で広範囲を担当しサービス付き高齢者住宅も経営されていました。診療では血圧や SpO₂測定に加え、心不全を考慮した心エコー検査が実施されていました。事前説明では在宅患者の平均在宅期間が約67.5日であることを知りました。また、ワクチン接種や訪問薬剤師・看護師との連携、認知機能低下に伴う予定管理の問題など、在宅医療の実際について学びました。



② 奥平外科医院（11月18日、12月9日）

訪問診療は医師と看護師のペアで行われており、個人宅や施設を含む複数の患者さんを診察しました。ALSなどの神経難病や慢性疾患、終末期の療養を在宅で行う患者さんに対応していました。気管チューブや胃ろう交換も見学しました。奥平先生が患者さんの口の動きや表情から意思を汲み取る姿が印象的で、信頼関係の重要性を実感しました。先生の、在宅医療では急性増悪時だけでなく平常時の状態把握が重要であるというお話がとても記憶に残りました。また、iPadを用いた迅速な診療記録や地域医療連携システムの活用を学びました。患者さんのご自宅が坂の上や細い道の先にある例も多く、レスパイト入院の利用においても移動自体が大きな負担になることを実感しました。



③ たくま医院（11月19日）

詫摩先生の外来診療を見学した後、訪問診療に同行しました。基本的には14時から15時半頃まで外来診療を行い、その後患者さん宅を訪問し、必要に応じて再び外来対応を行う診療体制でした。

診療風景はクリニック・在宅ともに和やかで温かい雰囲気でした。在宅のめまい患者さんへの点滴では、先生がハンガーで自作された点滴台を使用し、終了後は近所の方に抜去してもらおうよう手書きのイラストつきメモを残すなど、地域のつながりを生かした工夫が印象的でした。

④ 阿保外科医院（11月26日）

阿保先生は東長崎地区を中心に、がん終末期や心不全など多様な疾患の患者さんを診療されていました。往診時には電子カルテと連動したタブレットを活用した効率的な診療体制が整えられていました。専用のタッチペンによる手書き入力は自動で文字化され、モバイル通信を通じて即時にカルテへ反映されるため、訪問先でも診療内容の記録や処方入力が可能でした。必要時には紹介状もすぐに作成できるとのことで、迅速な診療が実現されていました。往診先では疼痛管理や褥瘡処置、カテーテル交換などが丁寧に行われ、訪問看護や薬局と連携したチーム医療により、患者さんが自宅で穏やかに最期を迎えられる体制が支えられていると感じました。

⑤ 谷川放射線科胃腸科医院（12月1日、12月16日）

在宅医療・施設往診の実習に同行しました。谷川放射線科胃腸科医院では、通院が難しくなった高齢者や慢性疾患の患者さんを中心に在宅医療を行っており、担当医は時間帯・曜日ごとに交代するチーム制をとっていました。iPadを使ったチームカルテで多職種間の情報がスムーズに共有されていました。在宅では、ガンマグロブリン血症の患者さんに対する輸血を見学しました。前日にクロスマッチ検査や不規則抗体検査が行われ、最初の30分はバイタルを観察して速度を調整するなど、細やかな安全管理がされていました。この経験から、在宅でも輸血を行うことで患者さんの生活の質を維持できることを実感しました。施設往診では複数の入居者を順番に診察し、慢性疾患の薬の管理や外部医療機関との連携の大切さを学び、限られた環境でも安全に医療を提供することの難しさと意義を感じました。



⑥ 安中外科・脳神経外科医院（12月2日）

安中先生は0歳児も含む小児から高齢者まで幅広い患者さんを対象に訪問診療をされていました。患者さんごとに必要な物品をまとめたバッグを持ち、効率的に診療されていました。褥瘡の処置や小児の呼吸器管理など多様な医療行為を行っていました。診療中はスマートフォンを使って医院スタッフや訪問看護師、外部の医療機関と密に情報を共有しており、迅速でスムーズな対応が印象的でした。安中先生は「頼まれたら断らない」という姿勢で、患者さんだけでなくご家族への支援も大切にされており、在宅医療の温かさや地域で支える医療の大切さを学びました。

⑦ ちひろ内科クリニック（12月17日）

土屋先生の往診に同行しました。患者さん宅や老人ホームを訪問し、生活環境や居住状況を把握することの重要性を学びました。また、血圧測定や胃ろう管理など、在宅でも行える医療技術を観察し、家族と協働しながら提供される在宅医療の実際を理解しました。さらに、ACP（アドバンス・ケア・プランニング）についても学びました。ACPは、患者本人が人生の最終段階をどのように過ごしたいかを事前に考え、本人・家族・医療者間で共有する取り組みです。実習中には「元気なうちから手帳」について説明を受け、実物もいただきました。この手帳は、元気なうちに自分の希望や価値観を整理し、将来の医療や介護の判断に役立つものです。また、土屋先生をはじめ医師会の先生方が作成した、ACPについて考える寸劇の動画も拝見しました。動画には知っている先生方や医療スタッフが出演しており、とても興味深く、ACPを現実的に理解する良い機会となりました。

在宅医療実習を通して、患者の生活環境や居住状況を把握することの重要性を実感しました。先生方の往診に同行し、血圧測定や胃ろう管理など、在宅でも行える医療技術を観察する中で、医療者と家族が協力して患者さんの生活を支えている様子を学ぶことができました。さらに、あじさいネットを使用して他院のカルテ記事やCT・MRIなどの画像を参照させていただき、予想以上に見やすくスムーズに確認できたことに驚きました。病院のカルテとほとんど同じ情報を患者宅でも確認できることは非常に便利であり、患者・医療者双方にとって大きなメリットがあることを実感しました。

今回の実習で得た経験を今後の医療に活かし、患者の生活背景や希望を踏まえたチーム医療を実践していきたいと考えています。最後に、本実習にご協力いただいた医師の先生方や医療スタッフの皆様、そして患者さんご家族の方々に心より感謝申し上げます。

実習報告会の様子

